

Bangladesh南部避難民保健医療支援事業派遣報告

2018年10月2日～11月1日 国際医療救援部 喜田たろう

ミャンマーラカイン州での暴力行為を避けるために大量の避難民の人々が国境を越えて、Bangladesh南部のCox's Bazarに流入してから1年以上が経ちました。日本赤十字社は、昨年9月より緊急対応ユニット(Emergency Response Unit, ERU)を出動し、保健医療、こころのケア支援をおこないましたが、その活動は今年5月以降、Bangladesh赤新月社との二国間支援事業として、引き継がれ現在に至っています。

私は、今年10月初旬より約4週間、事業管理者として派遣され、Bangladeshを再訪する機会をいただきました。ちょうど1年前の緊急救援の初動班、4月の最終班に引き続いて3度目のBangladesh派遣となりました。

避難民キャンプでは、道路や下水設備など様々なインフラや、キャンプ管理体制の整備が進み、避難民の人々の生活環境は格段に向上したようにもみえます。Bangladeshとミャンマー両国政府による、避難民の早急な帰還を実現するための協議が進められていますが、避難民たちの置かれた状況は不安定で、将来の見通しは立っていません。

かつての緊急救援の時期には日本人を含めて30名近い外国人要員が支援をおこなっていた本事業ですが、現在派遣中の外国人要員は、事業管理者、看護師2名、管理要員2名のみで、活動の中心は、Bangladesh赤新月社の医師、看護師、助産師、そして約70名の避難民からなるコミュニティボランティアにより継続されています。避難の長期化が避けられない状況にあって、日赤は現地の人々や避難民自身の防災能力や保健知識の向上を通じた、レジリエンスの強化を目指した活動に舵をきっています。



国際赤十字の協力を得て現地職員の面接試験を実施する

避難民の人々に赤十字の活動を理解してもらい、我々の受容を促進し、また効率的な活動を継続するために、定期的に仮設診療所周辺の避難民リーダーたちを集めて会議を開催しています。今回の会議では、予防接種キャンペーンや衛生知識普及イベントの開催など、日赤が予定している様々な活動を紹介し、また避難民たちからは、彼らが抱える問題や赤十字への要望について表明されるなど、活発な意見交換が交わされました。



定期的に避難民リーダーとの情報共有を行う

避難民キャンプが設置されているバングラデシュ南部は、これまでもサイクロンによる大きな被害を受けてきた地域で、土砂崩れや洪水などの自然災害の多発する地域でもあります。日赤が支援する仮設診療所は、丘の上に立地しており、5月頃から始まった雨季への備えのために、崖部分を大量のビニールシートで覆い、過去数カ月間、激しい雨に見舞われながらも、何とか耐えることができました。

この診療所は、地域の保健医療活動の拠点となっており、今後もその機能を維持するために、バングラデシュ赤新月社、国際赤十字とともに、建物の改築工事を実施することになりました。地盤強化を完了した後に、現在の竹とビニールシートで作られたテントを、サイクロンにも耐えられるプレハブ式の建物に建て替える予定になっています。



日赤が支援する仮設診療所、プレハブ製建物への改築が予定されている



激しい雨の中行われる測量作業



赤診療所のモデルとなるスイス赤十字社の診療所。

バングラデシュ南部避難民支援事業では、日赤を含む 30 社以上の赤十字社が支援を行っており、各国赤十字社による支援に、偏りや空白を生じさせないため、国際赤十字は **One Window Framework** という枠組みで調整を行なっています。今年 10 月下旬に開催された調整会議では、同枠組みの運営方針が確認され、出席した 10 社の代表により来年度の支援計画が共有されました。日赤は、2020 年 3 月までの事業計画を共有し、地域保健分野において国際赤十字を主導する意思があることを表明しました。

国際赤十字、ヨーロッパを中心とする他国赤十字社代表との意見交換を通じて、アジアを代表する赤十字社である日赤への大きな期待を感じました。



支援国赤十字社の調整会議



新しく開設された国際赤十字事務所